

世界遺産・白川郷での 地場資源活用型ものづくりの調査研究

三島 俊樹*¹ 鈴木 誠*²

はじめに

第1章 問題意識

第2章 実行委員会による研究会と見学会

第3章 実行委員会による展示会

おわりに

はじめに

本稿は、本学地域経済研究所の共同研究の指
定を受けて取り組んだ「地域資源活用型もの
づくりに関する調査研究事業」の成果をとりま
めたものである。

共同研究は既に3年程前から取り組んできた
が、共同研究者である三島俊樹（前白川郷荻町
の自然環境を守る会会長）より、地元白川村内
に地元住民を中心とする研究会を立ち上げ気運
を盛り上げたいとの意見が出され、新たな推進
体制に確立することとなった¹⁾。その後、三島
を委員長とする白川郷ものづくり実行委員会が
立ち上がり、財団法人岐阜県産業経済振興セン
ターが主宰する地域活性化ファンド²⁾の財政支
援を得て、積極的に現地研究会を行ってきた。
本稿は、三島委員長を中心とする白川郷もの
づくり委員会の研究成果を踏まえ、本研究所の共
同研究で得た知見を加えて執筆するものであ
る。

第1章では、白川郷ものづくり実行委員会の
趣旨や活動経過などを紹介する。第2章では、
研究会活動の一環として実施した石川県、富山
県など北陸地方の伝統工芸作家との交流会や行
政の支援機構を研修する見学会の様子を紹介す
る。第3章では、実行委員会の活動の成果発表
の場として白川村で開催した展示会の様子を紹介
する。

幸い、既に述べたとおり、私たちの共同研究
は、岐阜県地域活性化ファンドの支援と白川村
内外の職人や専門家の協力を得て、白川郷もの
づくり実行委員会という実行組織へと発展させ

ることができた。さらに、三島は自宅のある白
川村荻町の工房を一部改装して、実行委員会の
成果ともいえる地場資源を活用した木工作品等
の展示販売スペースを設け、訪れる観光客や地
元村民を迎え入れる実証実験に入っている。

年間150万人もの観光客が訪れる観光地域で
ありながら、白川村では「メイド・イン・シラ
カワムラ」といえる地元職人の手による地場産
品が、白川村内の土産物店等で観光客の目にと
まらず、訪れる観光客には世界遺産の風景や合
掌造りの見学を通じた人々の暮らしの変遷を知
らせ、村外から持ち込まれた土産物品の販売に
よって観光地域を維持してきたといえる。こう
した状況を反省し、白川村の資源を活かしたも
のづくりと観光交流に取り組んだ三島を中心と
する現地実行委員会のもとには様々な反響が寄
せられている。その一部は、今回行った展示会
での見学者アンケート結果にも垣間見える。そ
れらをもとに作品内容などを再度検証し、本格
的なものづくりアイデア、デザイン開発、マー
ケティング等にも取り組んでいく予定である。
その意味で、本稿は、私たちの研究会並びに白
川郷ものづくり実行委員会の中間報告といえる
ものである。

第1章 問題意識

日本人の精神性を維持する上で、「文化的景
観の保存」やそれに関連する種々の「まちづく
り」は、今日、全国的に大きなテーマとなっ
ている。しかし、グローバル化という社会経済を
普遍化・単一化しようとする力の中で、文化資
源を活かした特色ある「まちづくり」を成し遂
げようとするならば、その価値に投資を繰り返
す新たな「地域経済」循環がなくてはならない。
政府の文化行政の一環として公的資金（補助金

*¹白川郷ものづくり実行委員会会長、*²岐阜経済大学地域経済研究所長・経済学部教授

等)を得て地域が博物館的に鑑賞物を保存利活用するという従属的姿勢では、文化資源と経済活動が遊離したままである。むしろ、地域が主体性を持って文化資源の利活用を通じた地域経済の確立をしなくてはならない。

文化資源それ自体を利用して人々が暮らし、暮らしながらそれを実際に利活用することで伝統文化を継承し、継承しながらその優れた価値を地域固有の文化資源として後生に伝え、世界に発信していく公益的活動を資金面から持続的に支えていく地域経済循環を確立することが急がれている。

地域固有の文化資源を活かし、その土地に暮らし続ける人々が商品やデザインを開発し、その購買活動や学習交流活動を通じて、文化資源を守る人々や、商品・デザインを開発する人々が暮らし続けられる文化的社会を地域において築いていくことが重要である。

なぜならば、効率的な生活様式、画一的な生活習慣や価値観、グローバル経済による低廉安価な商品やデザインの輸入に押され、今やその土地で長い歴史の中で培ってきた伝統技術やそれに依拠する伝統産業、伝統産業に携わる中で継承されてきた農家の知恵や技法、結いの精神、「家」を造る大工職人の知恵や技能、伝承芸能など、日本文化の根底をなす「手仕事」の技術や「それに合わせた道具を考案する」知恵と精神性が、担い手の不在が続く中で急速に失われつつあるからである。

疲弊した地方経済の中で、これまで身近な地域づくりにも活躍してきた建築・建設関連の経営者や従事者は、経営難や将来への生活不安など、多くの悩みを抱えて生活しているのが現状である。ものづくりの現場には、利潤追求や拡大成長ばかりに傾倒した大量生産・大量消費による品質の低下や過剰なまでの価格競争が押し寄せ、日本文化に根ざしたものづくり人、技術、風習、産業は、もはや存在することができないのではないかといった危機感を感じることも多くなった。

こうした問題意識を抱かざるを得なくなった今、白川郷に生きる者は、「霊峰白山」からの

大自然の恩恵をもう一度再認識し、それに預かる、県境を越えた人々の技術や知恵を結集し、「私たちがらしい」「私たちの地域らしい」ものを創造しながら、「生きがい」「生きる意味」を再発見し、それを形に表現し、それに価値を見いだす人々に支えられた地域経済をこの土地に作り上げていかななくてはならないと考えている。

白川郷を訪れる多くの日本人・外国人が、視覚・触覚・味覚・嗅覚・聴覚の五感全体で白川郷の文化的価値を感じ取り、心の奥の第六感に響くような「もの」を、汗をかき、魂を込めて作り上げていきたいと思っている。



白川郷での茅葺きの風景 (白川村ホームページより)

第2章 実行委員会による研究会と見学会

2-1 研究会の内容

第1回研究会では、今後の同委員会の進め方をめぐり、率直な意見交換が行われた。研究会に先立ち、白川郷ものづくり実行委員会の三島から「白川郷の今後についての問題解決の糸口になるべく『ものづくり』について検討を続けてきた。しかし、残念ながら現状の白川郷においては独自のものづくりといえるものがない。今後、この実行委員会を中心に『白川郷らしいものづくり』の企画と実践に取り組んでいきたい」という趣旨説明がなされ、活発な意見交換を行った。

その主な内容は、以下のとおりである。

- (1) 生活に密着したところからものづくりを行ない、地元の人に先ず使って貰えるもの

づくりから始める。

- (2) 第一歩として「箸」づくりはどうか。
- (3) 白川郷の店舗全体で割り箸をやめて白川郷でつくったオリジナルの箸を使うようにする。
- (4) お客さんにはお買い求め頂いて、持ち帰ってもらう。
- (5) 「箸を無償で出すことはやめた」とエコロジーの視点からもメディアに訴えることもできる。
- (6) 地元でつくって、使って、見せて、売ってオリジナリティを出していく。
- (7) 商工会の次の事業に結びつける可能性もある。試作→市場調査→来年度ものをつくっていく予定。
- (8) 東京の展示会でイベント参加することもあるが、白川村のものがなく寂しい。
- (9) 富山県側には、ものづくりの成果が豊富にある。今回のプロジェクト(白川郷ものづくり実行委員会)でも、ぜひ五箇山と一体になって進めたい。
- (10) 最終的に出来上がったものを一つのブランドとして作り上げて行きたい。

などである。

また、第2回研究会では、見学会候補地として(1)富山県総合デザインセンター、富山県クラフトセンター、(2)富山県産業高度化センター展示室(富山プロダクツ選定商品の視察見学)、(3)ものづくり現場の工場見学で開発から事業の立ち上げまでの成果をヒアリング調査、などとし、①富山(株)高田製作所「フィオーリキアーリ：輝く聡明な花」アルミ鋳造、②富山(株)能作真鍮、青銅、錫一照明器具、器、キャンドルスタンド、③福井(株)マツ勸「箸蔵」など、小浜市の箸メーカー、④山形指物照明「林芸芸」、「山形工房・デザイナー等、が挙げられ検討を行った。

2-2 見学会の成果

見学会は、2008年5月26日、三島敏樹をはじめ地元の実行委員会委員、案内人として谷路一昭氏(建築設計家)を迎えて行った。

①株式会社能作

「制作したもののユーザーに直接会いたい」といった思いから、ものづくりで成功して来た経過について説明をうかがった。その後、木の型の保存室と制作工場を見学した。懇談の席上、東京での展覧会を契機に、デパートなど小売店舗とのつながりができたこと、デパート・通販・ネットなど販売流通の話、風鈴の大ヒットにまつわる話、地域の伝統産業界への貢献の話、デザイナーとの仕事、地域の教育貢献として実施されている小学校伝統授業の話など多方面にわたる話題の提供を受けることができた。参加者からは「ものづくり」と「流通販売」、「地域貢献」などについて、実体験を交えた生の声に、深い感銘を受けたとの声を聞くことができた。

②富山デザインセンター

施設についての解説とセンター機能の解説をうかがい、施設を見学した。同センターに関しては富山県側のメンバーにも知らない者がいて、ものづくりの様々な過程でサポートを頂ける施設に、驚きの声が上がった。

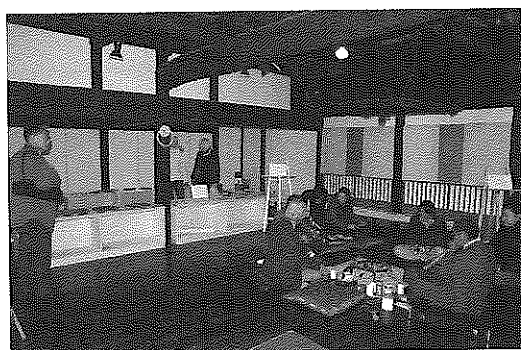
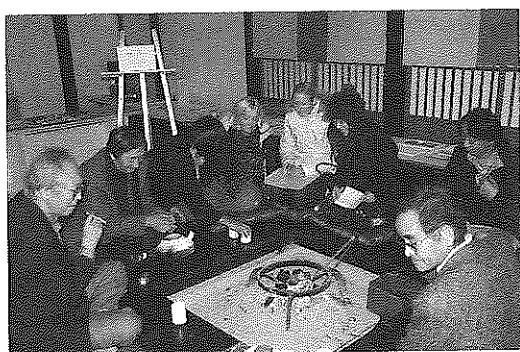
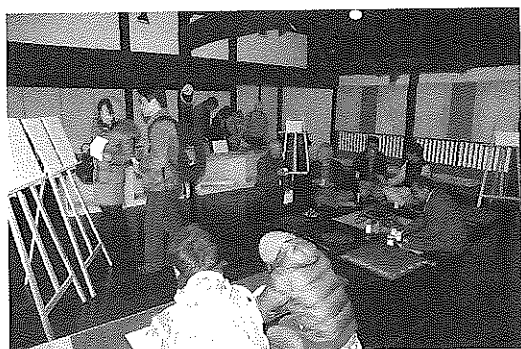
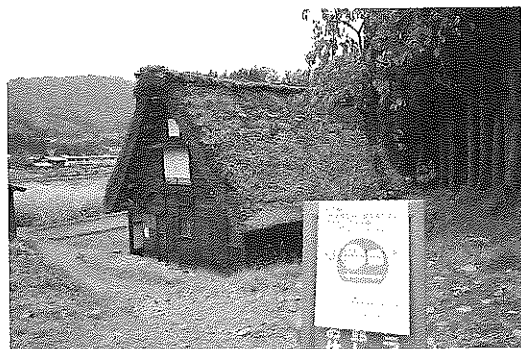
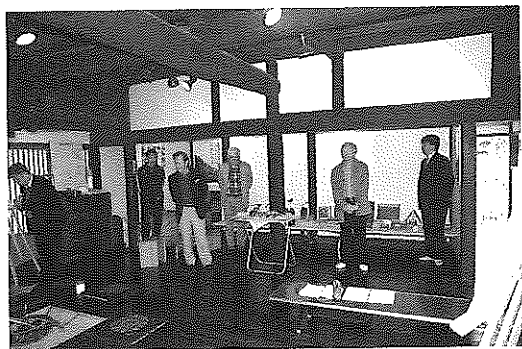
③辰口アーティスト村

- ・野村大仙氏(蕎麦、漆器)：曜日限定で開くそば屋では、店内に自作の漆作品も並べ売る。店で使用する食器にも作品が使われる。野村氏よりものづくり、店づくりについてお話をうかがい、本実行委員会でのものづくりと、場所づくりについて参加者はイメージを膨らませることができた。
- ・山下晴子氏(彫刻家)：石を中心とした作品が多い。
- ・谷路一昭氏(建築設計家)：木にこだわりを持たれ、木を活かした家を多く設計されている。この村の設計作品を見学。創作の場として地域の風景になじんだ素晴らしい環境に、参加者は心を動かされた。

④金沢市民芸術村

職人が技術を磨く施設、市民が芸術文化活動を行う施設を見学した。農家を移築した中の

(谷口村長の挨拶(左下)と展示会の様子)

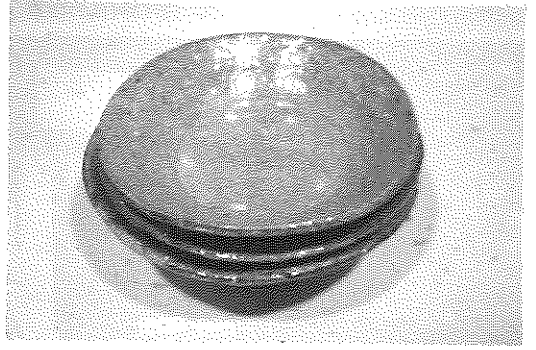
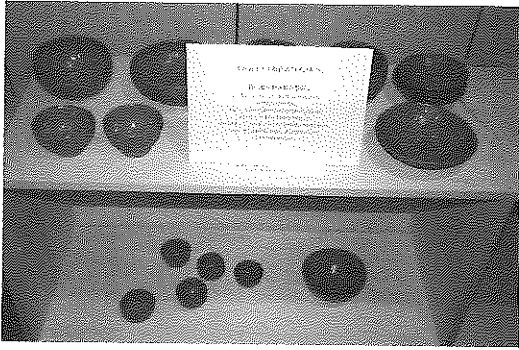


あった。また、品々に興味を持って下さった方も多く、特に木工の作品には人気があった。興味はあるが購入となると動きが無く、一部の方がフクロウを購入したいと言われ、スプーン、パンについては、販売を希望される方が多かった(いずれも非売品)。ただ、値付け商品はやや高い印象だったのか、購入希望者はなかった。

売ることを目的として、専門に誰かがつき、説明を加えれば違ったと思うが、少しの説明で買われるのは、せいぜい500円の小物だった。

最も大きな課題は、村の人々に声をかけたの

にも関わらず、来場者はごく一部で一桁だった点である。関心が低いのか、代表の呼びかけが効かなかったのか、白川郷の人々に伝えるという目的を達成できなかったことが、今回の展示会の課題と言わざるをえない。地域の諸事情もあり、地元からの出品協力は、三島の手作りの品、山腰さんのパンのみであり、それ以外は地域外という状況であった。また実行委員会メンバーであっても、五箇山、金沢、富山からの出品であったのは事実で、こうした状況は今後の大きな課題といえる。



■十握氏（陶芸家）作品

：白川郷の焼き物の黎明：

白川郷の川砂に九谷の赤土を外割30%程度合わせ、手ひねりにて制作する。

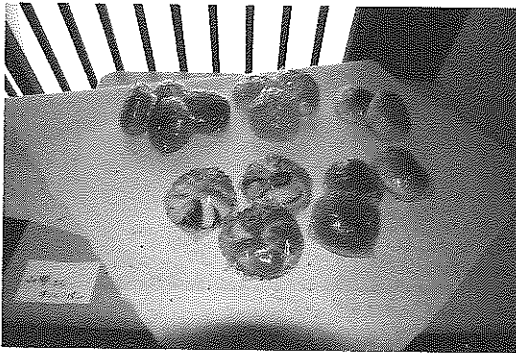
そして、生掛けで合掌造りの家の囲炉裏の灰を貰い受け、フリット5：灰1として筆ぬりて施袖した。

焼成方法として、将来は、川石にて穴窯を築窯して焼成法を探る。

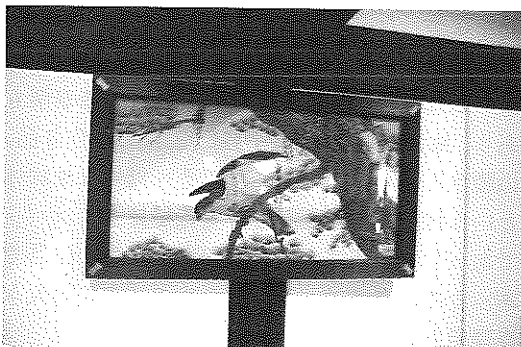
今回は、酸化は電気窯にて焼成、還元雰囲気のもの、小さな穴窯で焼成した。

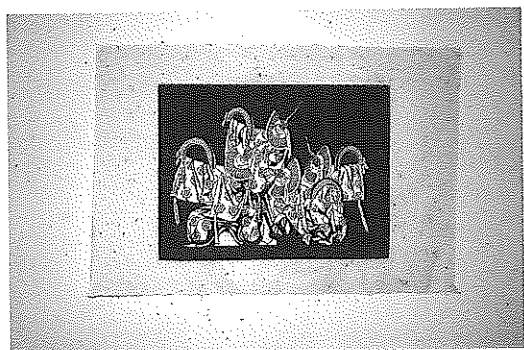


■地域手作り品



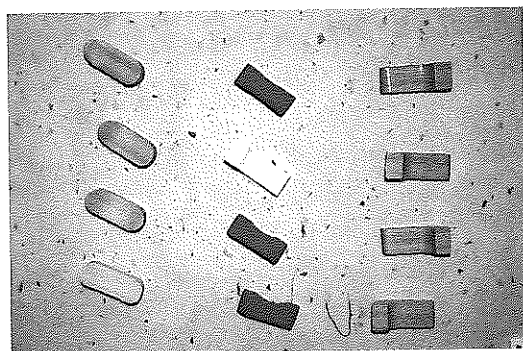
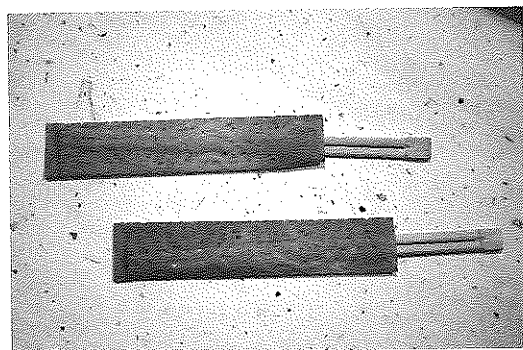
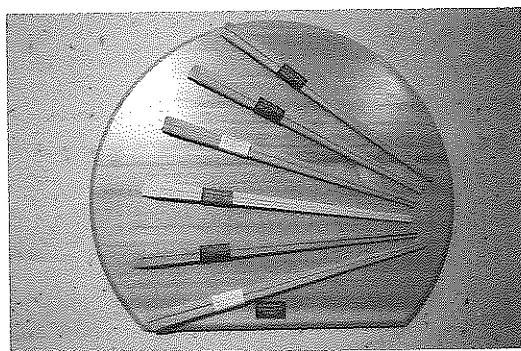
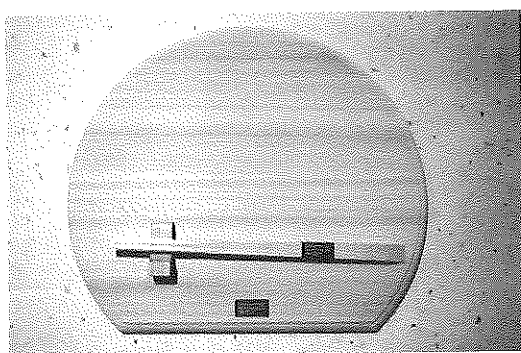
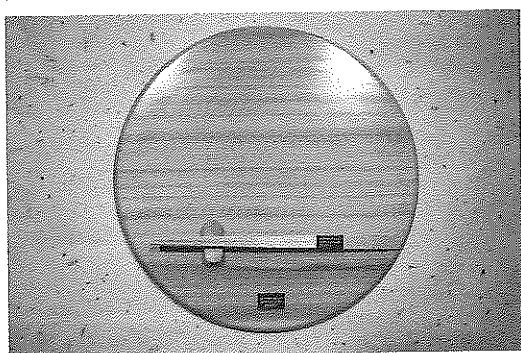
・山腰さんこだわりの手作りばん

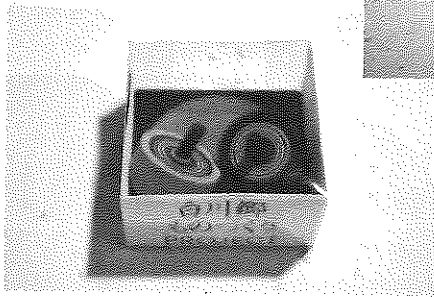
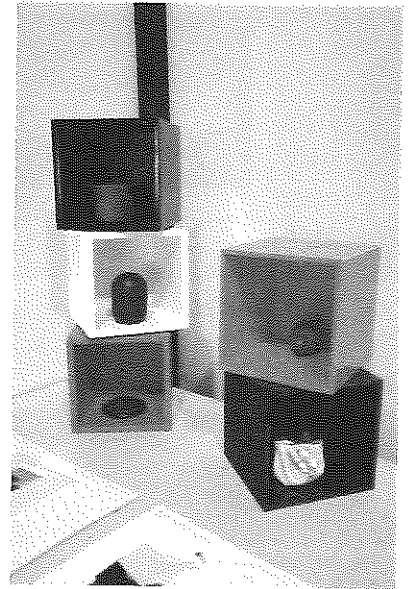
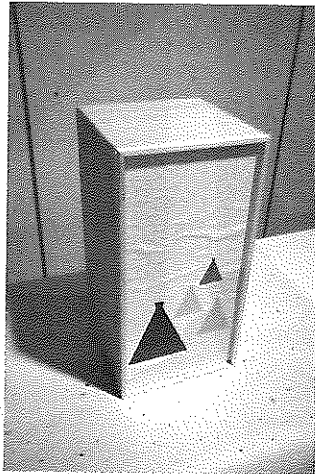
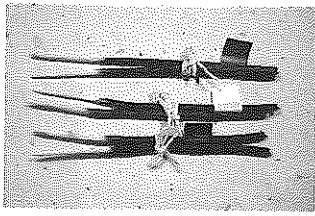




・前川氏切り絵作品

■デザイン提案関連展示品





3-2 展示会の評価

展示会に來会された方々を対象に、アンケートを実施した。その結果は、次のとおりであった。

■総数259枚

〈年代別の回答〉

・10代 (7枚)

・お住まい

岐阜県内2、愛知県4、東京1

・ものづくりへの興味

とてもある1、ある5、あまりない1

・20代 (60枚)

・お住まい

岐阜県内2、その他3、静岡2、滋賀1、福井2、栃木1、山梨1、福岡2、兵庫3、神奈川3、鳥取1、大阪2、東京3、新潟1、群馬1、石川14、三重2、愛知15、タイランド1

・ものづくりへの興味

とてもある18、ある34、あまりない5、

無回答3

・30代 (57枚)

・お住まい

岐阜県内3、その他9、北海道1、山梨1、埼玉1、千葉3、富山1、大阪6、愛知11、福岡1、神奈川5、兵庫2、長崎1、新潟1、静岡5、栃木1、東京4、三重1

・ものづくりへの興味

とてもある16、ある36、あまりない4、無回答1

・40代 (37枚)

・お住まい

白川村2、その他4、長野1、茨木1、和歌山1、三重3、新潟3、兵庫2、埼玉2、京都2、東京5、石川2、静岡1、愛知3、大阪4、栃木1

・ものづくりへの興味

とてもある6、ある19、あまりない11、無回答1

・50代 (57枚)

・お住まい

岐阜県内7、長野2、三重2、新潟2、静岡2、山口1、富山2、香川2、愛知8、石川3、神奈川4、滋賀1、埼玉7、東京4、千葉1、北海道2、福岡4、無回答3

・ものづくりへの興味

とてもある8、ある39、あまりない9、無回答1

・60代 (35枚)

・お住まい

岐阜県内0、神奈川5、山口1、兵庫2、東京1、滋賀1、富山1、大分1、香川2、埼玉5、三重1、千葉2、愛知3、静岡1、北海道1、無回答8

・ものづくりへの興味

とてもある9、ある22、あまりない4

・70代 (4枚)

・お住まい

岐阜県内0、埼玉3、東京1

・ものづくりへの興味

とてもある0、ある4

・その他 (2枚)

・お住まい

フランス1、ポルトガル1

・ものづくりへの興味 無回答

(自由回答)(代表的なものを2~3記載)

・10代

・ものづくりはすごいと思った。

・時計がかわいかった。

・20代

・木工はついつい手を触れたいようなつやがあって素敵だと思いました。

・自然が豊富なのでこのような作品は白川郷に合うと思います。

・白川郷に来るたびに、お土産の原産地が高

山とか違う地域であることを寂しく思っていました。展示の中には今すぐ購入したいと思えるモノもありました。

・30代

・いくつか欲しいものがあつたが、売ってないのですか？

・節約ブームと重なり粹に楽しめると思いますが。

・まねでない、その土地ならではのものづくりに期待します。

・40代

・作り手の気持でなく買い手の気持で。

・地元の材を使つてのものづくりは、未来へ向かつて大切なことだと思っています。

・白川村の素材を使用したものが広く伝わり、こだわりとして使つていただけることを期待します。

・50代

・どの作品も、素朴で落ち着いていて味わい深いです。

・小物については同じような物がどこにも見受けられますので、地元の食材などの食品づくりも良いと思います。(原材料が中国からの輸入でないもの)

・素朴なものから物を作ると、心が豊かになりますね。

・これらのものなら単なる旅のみやげではなく永久的に使える、旅の思い出になると思いました。あとは価格の問題だと思います。

・あこがれます。

・60代

・尺八の音がよかつた。

・昔の素晴らしさを感じました。

・ぬくもりが感じられる空間でゆっくりと癒されました。

・皆様心をこめてお作りになり素晴らしいものばかりでした。

・自分でも作つてみたい。

・70代

・ただ感動しています。

白川郷展示会 アンケート

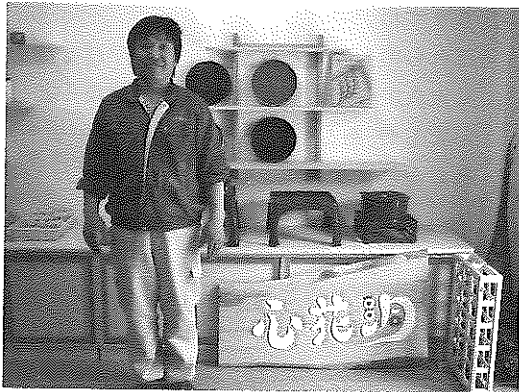
- ・お住まい
白川村 五箇山 岐阜県内
その他 ()
- ・おとし
10代 20代 30代 40代
50代 60代 70以上
- ・ものづくりへの興味
とてもある ある あまりない
- ・感想をご自由にお書き下さい

ありがとうございました
白川郷ものづくり実行委員会

白川郷展示会 アンケート

- ・お住まい
白川村 五箇山 岐阜県内
その他 ()
- ・おとし
10代 20代 30代 40代
50代 60代 70以上
- ・ものづくりへの興味
とてもある ある あまりない
- ・感想をご自由にお書き下さい

ありがとうございました
白川郷ものづくり実行委員会



三島のアトリエには輪島の工芸品も陳列



白川村産の建材で作った障子に五箇山和紙を貼る

おわりに

アンケート結果によれば、259人のうち回答者のうち82.2%の人々から、ものづくりに対する興味が「ある」との回答を得た。この意見の

中には、一般的に興味関心があるというよりも、白川村らしいものづくりへの期待を込めたものが多く見られた。白川村の職人が地元の資源を使い商品をつくっていくことが何よりも期待されており、その際、デザインも地元で考案され

ることはもちろん、使用する消費者・生活者の立場に立った利用価値の高いものであることが期待されていることが判明した。

問題は、価格であるという回答からも明らかのように、手作り品の単価はどうしても高くなる。それをいかに抑えるか。他方、本物志向の消費者が高価であっても購入を希望する商品を作ることが、生産者の安定的供給を白川村で行う上で重要である。それには、多様な生活ニーズと価格志向がある都市生活者と直に向きあい、生活ニーズを満たし、新たな生活創造を提案できる総合力が必要である。特に、生活者一人ひとりのオンリーワン商品を作り上げるデザイン力、美術力、販売力を備えることがポイントになる。来村者（観光者）が短時間で見て購入する低価格志向の汎用品ではなく、即売も可能な高級品を生産工程も明らかにして納得した上での購入を促すこと、それとともにWEBサイトを活用したネット販売、展示会などを通じた本物志向の生活者との文化交流やネットワークづくりなども展望する必要がある。

なお、アンケートの中には、訪れた際に地元の食文化が十分に育っていないことを指摘する声も聞かれた。白川村産の食文化を育てる一つとして、今回の展示品を活かすこと、さらに村の食堂や民宿などで利用を促すなど、村内外で白川村産の手作り品を普及させていくことが必要であると考えている。

注

- 1) 白川郷荻町の自然環境を守る会は、世界遺産地区である荻町の住民が中心となって合掌集落や周辺の自然環境の保全に取り組む民間団体。
- 2) 岐阜県地域活性化ファンド事業「地域ブランドづくりスタートアップ支援事業」(2007年12月1日から2008年11月30日)より1,365,000円の助成を得て実行委員会を立ち上げ活動を開始した。

参考文献

- ・谷口尚(白川村長)・鈴木誠『めざせ日本一美しい村—世界遺産の村の自治と自立の設計図—』自治体研究社、2006年7月
- ・鳥越皓之、家中茂、藤村美穂『景観形成と地域コミュ

ニティ』農文協、2009年2月
・三島俊樹「町並みインタビュー・三島俊樹」『季刊まちづくり』2008年9月20日

